

# 絵本を契機に未就学世代の博物館利用を促進する

## ——「えほん meets 博物館」を通じた 地域のネットワーク構築の可能性

国立科学博物館 事業推進部 学習課 神島 智美  
渡邊 百合子  
小川 達也  
赤尾 萌  
茂田 由起子

### 1. はじめに

国立科学博物館では、平成27年7月のリニューアルオープンにおいて展示室「親と子のたんけんひろば コンパス」(以下、コンパス)を開設した。未就学世代の科学リテラシー涵養を目的としたコンパスでは、展示室のコンセプトを踏まえたプログラムを開発、発信している。

平成27年度に開発した「えほん meets 博物館」もこうしたプログラムの一つであり、子供に身近な絵本を用いた展示観覧という手法を提案し、未就学世代とその保護者の積極的な博物館利用を促すことを目的としている。全国の博物館で同様の事業が広がり、未就学世代向け事業の契機となることを目指しており、これまで他館での実施も含め計3回開催している。

ここでは、「えほん meets 博物館」のコンセプトおよび実施事例について紹介する。また、本研究発表大会のテーマである「地域文化の核となる博物館」に照らし、本プログラムを実践することで、博物館が学びの場としてさらに機能していくためにどのような取り組みが必要となるかについて考察をおこなう。

### 2. 「親と子のたんけんひろば コンパス」の開設

平成27年7月に開設した「コンパス」は、主に4～6歳の未就学世代とその保護者を対象にした展示室である。対象設定の理由としては、近年の当館(上野地区)来館者のうち約1割が個人利用の未就学世代でありながら、従来の展示・学習支援活動のほとんどが小学生以上を対象としてきたことが挙げられる。

展示室開発にあたっては、全国の科学系博物館の活動についての調査結果(※1)を参照し、未就学世代の科学リテラシーの涵養、特に「感性の涵養(感じる)」および「思考習慣の涵養(考える)」を目的とした。また、上記の目的のためには未就学世代にとって「外界との媒介者」(※2)となる保護者との共通した体験が重要であるという考えから、コンパスでは、子供と保護者が博物館体験をともにし、日常に持ち帰ることで、博物館や自然科学を身近に感じ、考える契機となることを目指している。

そのため、コンパスでは大人の補助がないと見られない高さに実物標本を置くなど、両者のコミュニケーションを促すしかけを取り入れた空間とした。また、こうした空間の中でおこなわれるワークショップ等のプログラムも開発しており、展示室の概念とともに発信している。



「親子のたんけんひろば コンパス」全景



「コンパス」内でのワークショップの様子

### 3. 「えほん meets 博物館」のコンセプトと事例

「えほん meets 博物館」も、コンパスのプログラムの一環として開発されたものである。「絵本を持って博物館をまわってみよう」をテーマとし、絵本に関連付けた博物館観覧の手法を、未就学世代を持つ保護者や教育関係者へ提案することで未就学世代の博物館活用を促すことを目的としている。

開発にあたっては、

- ①豊かなイメージを持ち絵本と向き合えるよう、絵解きのように挿絵から物語を楽しむ方法を提示する
- ②繰り返し親子で絵本を共有する時間の中で次第に会話が豊かになるよう、担当編集者や監修者の思いなど絵本にまつわるバックグラウンドをその要素として届ける

といった点を要とした。これは、文部科学省「幼稚園教育要領」の言葉領域の取り扱いにおける「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにする」(※3)という留意点や、秋田(2008)による「大人が子どもたちと絵本との出会いの場やコミュニケーション過程を通して絵本の世界に誘うことで、子どもは絵本の楽しさや面白さを知る」(※4)という指摘を踏まえたものである。

以下では、1)から3)の3つの実施事例を紹介する。

- 1)「えほん meets 博物館『せいめいのれきし』」(平成27年12月、於：国立科学博物館)
- 2)「えほん meets 博物館『せいめいのれきし(改訂版)』in 生命の海科学館」(平成28年10月、於：蒲郡市生命の海科学館)
- 3)「えほん meets 博物館『くらべて わけて ならべてみよう!』」(平成29年2月、於：国立科学博物館)

1) は本プログラムの初の開催事例である。未就学世代の保護者および教育関係者を対象とし、コンパスの理念を伝えることで親世代の気づきを促し、間接的に未就学世代の博物館利用を促すことを目的とした。また、後述するように題材とする絵本の人気が既に確立されていること、監修者が当館研究者であることも特徴といえる。

2) は、本プログラムが全国的に広がっていくことを目指し、蒲郡市生命の海科学館において実施した事例である。1) と同じ絵本を題材としながら、実施場所となる展示空間や解説を担当する博物館職員が変更されたこと、さらに主に親子を対象としたことが特徴となる。

3) は、本プログラムをより汎用性の高いものとするため、題材とする絵本をこれまでから変更したほか、「親子向け」「大人向け」と対象を分けて実施した事例である。

### 1) えほん meets 博物館「せいめいのれきし」(於：国立科学博物館)

平成 27 年 12 月に実施した「えほん meets 博物館『せいめいのれきし』」(主催：国立科学博物館、岩波書店)は、当館研究者が監修し、平成 27 年夏に半世紀ぶりに日本語版が改訂されたバージニア・リー・バートン(以下、バートン)文・絵『せいめいのれきし(改訂版)』(岩波書店刊)を題材とした。『せいめいのれきし』では、地球が生まれてから現在に至るまでの時代の移り変わりが舞台に見立てて語られる。博物館がテーマであるだけでなく、長年多くの人に愛されてきた点から、博物館へ来たことのない未就学世代を子供に持つ絵本ファン層を博物館へ呼び込む目的も果たせると考えた。また、「保護者が博物館体験を家庭に持ち帰り、科学と子供の学びの媒介者となってもらおう」というコンパスの理念を直に親世代へ伝えることで保護者の気づきを促すという目的のため、対象は未就学世代の保護者・教育関係者とした。

具体的な流れとして、まず、コンパスの理念を保護者と共有した後、岩波書店の担当編集者から作者バートンと絵本の内容について、当館研究者からバートンと博物館の関わりや『せいめいのれきし』の楽しみ方について紹介をした。つぎに、絵本に登場する生物を常設展示から探し出すミッションに挑戦してもらい、答え合わせとして展示標本を前に解説をおこなった。



「えほん meets 博物館『せいめいのれきし』」チラシ



絵本に登場する生き物さがしの様子

実施後のアンケートでは、

- ・生きていた頃の姿を想像しながら、挿絵と資料を比べつつ楽しんで博物館を（子供と）まわりたい。
- ・親子で絵本を読んで“おめあて”を作り博物館に行くことができそうです。

といった回答が寄せられた。後日、実際に絵本を持って博物館を訪れた親子もおり、保護者が体験を家庭に持ち帰り、子供と共有することでその後の来館につながっている様子が見えられた。

## 2) えほん meets 博物館「せいめいのれきし（改訂版）」in 生命の海科学館

1) の実施後、蒲郡市生命の海科学館（以下、生命の海科学館）の山中敦子館長より、『せいめいのれきし』を題材とした「えほん meets 博物館」を生命の海科学館でも実施したいという打診があった。当館でも本プログラムの波及のため「えほん meets 博物館」の汎用性をはかるとともに、他館での実施にあたりどのような連携の方法が可能であるのかを探る必要があり、協力して実施することとなった。事業理念の共有や出版社との著作権に関するやりとり等、数回の打合せを経て、平成 28 年 10 月に「えほん meets 博物館『せいめいのれきし（改訂版）』in 生命の海科学館」（主催：蒲郡市生命の海科学館、共催：国立科学博物館、協力：岩波書店）が実現した。

対象の設定にあたっては、午前・午後計 2 回の実施とし、1 回目（午前）の対象を未就学児の保護者・教育関係者（小さな子供も一緒に参加可）、2 回目（午後）を小学生以上の子供とその保護者とした。これは、生命の海科学館の幼児用スペースを利用している子供たちに、館のテーマである地球と生命の歴史をベースとした展示室にも関心をもってもらい、展示の物語性を知ってほしい、という山中館長の思いが込められたものである。

具体的な流れとしては、1 回目・2 回目とも、当館職員より博物館と家庭をつなぐツールである絵本の活用法について紹介した後、絵本『せいめいのれきし』に登場する標本について、山中館長から観察するポイントについて紹介した。それを踏まえ、参加者からの自由闊達な意見を促しつつ、ミッションシートを用いた展示室の体験をおこなった。また、会場には『せいめいのれきし』を紹介するパネルを設置し、来館者が自由に観覧できるようにした。

参加者のアンケートでは、

- ・「これ、隕石だよ。」など見た実物に興味を持ったようでした。
- ・地球誕生や生命の歴史はとても年月が長く、ウン億年といわれてもピンと来ませんが、絵本で実際に描かれている中で、目の前に実物が存在することに親のほうが改めて実感でき、驚きました。

など、絵本の中に登場したものを博物館で実際に見ることができる驚きについての感想が得られた。

また今回は、生命の海科学館での実施を通じて、展示資料や学芸員の専門分野といった各館の特徴を活かした事業形態が可能であることが明らかになった。たとえば、1)と同じ絵本を題材に据えながらも、生命の海科学館の展示をベースとした独自ワークシートが開発されるとともに、隕石を専門とする山中館長ならではの、問いかけや示唆に富んだ読み聞かせ・展示解説がおこなわれた。さらに「絵本を持ってミュージアムに行こう！キャンペーン」が実施され、参加者が絵本を持参して再来館することを促すとともに、プログラムの効果を測る方策も取り入れられた。

実施後、主催館である生命の海科学館へのヒアリングをおこなったところ、期待していた効果として「①絵本の内容と展示のつながりを知って、参加者の展示に関する理解が一層進むこと、②特に幼児に対して、展示の意味を学ぶことができる効果的なプログラムの事例開



山中館長より『せいめいのれきし』の紹介と読み聞かせを交えた解説



ミッションシートを用いた展示室体験

発」の2点が挙げられ、いずれも高い効果が見られたという回答を得ることができた。

### 3) えほん meets 博物館「くらべて わけて ならべてみよう！」(於：国立科学博物館)

平成29年2月には、当館にて2回目となる「えほん meets 博物館」を実施した。今回は、本プログラムの波及を図り、全国的な広がりを持つプログラムとすることを目的とし、他館の方へも見学を募ることとした。見学者の募集に当たっては全国科学博物館協議会のメーリングリストを活用し、全国の博物館から見学いただける方を募集している。

さらに、題材となる絵本と参加対象者を変更し、より汎用性の高いプログラムとして確立することも目的とした。今回題材とした絵本は、平成27年7月のコンパス開設にあたって、当館が著者となった『くらべて わけて ならべてみよう！——はくぶつかんでみ



題材とした絵本  
『くらべて わけて ならべてみよう！』

---

つけたもの』(創元社刊)とした。この絵本は、博物館を訪れた親子が展示資料の比較や分類に挑戦することで、普段研究者がおこなっている活動を追体験するという内容である。比較・分類といった手法自体をテーマとした絵本であるため、様々な展示資料に対して応用可能であるという特徴があり、今後当館に限らず他館でも同様の実施が可能だと考えた。

今回は2回に分けて実施し、それぞれの対象を「親子向け」(主に4～6歳とその保護者)、「大人向け」(未就学児の保護者・教育関係者)とした。「親子向け」はイベント終了後も「展示資料の共通点や相違点を見つける」という視点で親子の展示観覧を促すことを目的とし、親子で比較・分類のワークに取り組む内容となっている。「大人向け」では、主に「コンパス」利用経験はあるが他の常設展示になじみのない保護者が、未就学世代の子供と展示観覧をする動機付けとなることを目的とした。内容は、保護者がワークに取り組んだ後、当館職員から家庭でのワークの応用方法や、子供と来館する際の活用法を紹介するというものである。

研究発表大会の直前に実施をおこなうため、この詳細については大会当日に紹介する。

## 4. 「えほん meets 博物館」実施の成果

本プログラムによる、博物館、来館者、そして出版社にとっての成果について考えたい。

まず、博物館にとっては、三つの成果があると考えている。

博物館にとって一つ目の成果は、本プログラムが、未就学世代対象とした展示活用プログラムの一つとなることである。当館に限らず、生命の海科学館、あるいは他館においても「来館者層が低年齢化する傾向にあり、未就学世代向けのプログラム開発が必要」だという声を聞く機会が多い。また実際に参加者募集にあたっては多数の申し込みがあり、保護者にとっても子供と一緒に楽しめる、あるいは参加後に子供と共有をできるような博物館利用のしかたに対してニーズが高いことが改めて明らかになっている。こうした現状を踏まえると、「えほん meets 博物館」は題材や実施館を限定せずに、かつ常設展示を活用できる汎用性の高いものであると考えている。

二つ目は、絵本には関心を持っているものの、それまで博物館にはなじみの薄かった層を新たな来館者として獲得するきっかけとなったことである。特に『せいめいのれきし』のように、コアなファン層が存在する絵本であればその効果はより高いといえる。例えば、3. の1)「えほん meets 博物館『せいめいのれきし』」(於：国立科学博物館)の参加者アンケートでは、出版社のSNSでの告知をきっかけに申し込みをした、という回答が一定数得られている。

博物館にとっての三つ目の成果は、出版社との協力により、絵本をプログラムで扱う際の著作権等の扱いを学ぶ機会を得たことである。たとえば3. の1)「えほん meets 博物館『せいめいのれきし』」(於：国立科学博物館)での実施にあたっては、出版社との連携の下、イベント当日に絵本の内容について担当編集者が紹介をおこなう等の協力を得た。また、企画段階では著作権の取扱いについてアドバイスを得た。こうした協力体制の構築や著作権関連の事柄へ

の習熟が、今後同様の事業をおこなう際にも活用できると考えている。

また、来館者、特に未就学世代を持つ保護者にとっては、博物館の展示室を子供と一緒に楽しむことにつながったと考えている。「ただ観るだけでなく、ワークをしながら『体験』すること、またその教材は自宅の絵本や図鑑を使えることを教えていただきました。」といった感想も得られたことから、博物館の新たな楽しみ方を見つける機会を提供できたと捉えている。

そして、出版社にとっては絵本の広報に資するほか、博物館来館者層を新たな読者として獲得する契機となることが考えられる。

## 5. 課題と今後の展開

当館では、今後「えほん meets 博物館」自体を博物館と絵本出版社が連携する際の共通の事業名称と位置付けることで全国的な連携を図る方策を立て、未就学世代の科学リテラシーの涵養を目標に、同様の事業が全国の博物館に広がることを目指している。以下では、本研究発表大会のテーマである「地域文化の核となる博物館～それを実現する資質能力」という観点から、プログラムを波及させるにあたっての課題と今後の展開について述べ、まとめとしたい。

「えほん meets 博物館」が各地域において未就学世代の科学リテラシー涵養の契機となるためには、まず地域や実施館の状況に応じたプログラム構成が必要であると考えている。例えば3. の2)「えほん meets 博物館『せいめいのれきし (改訂版)』in 生命の海科学館」における対象設定のように、実施館が未就学世代や親子の利用に関して感じている課題や改善点に応じてプログラム内容をアレンジすることで、今後の未就学世代向けの事業展開を検討する契機ともなる。「えほん meets 博物館」の理念は大切にしながらも、今後も柔軟性を持ったプログラムとして波及を図りたい。

また、博物館が新たに未就学世代やその保護者を対象とする事業を開始する場合、ノウハウや人材の点で困難な場合がある。例えば3. の2)「えほん meets 博物館『せいめいのれきし (改訂版)』in 生命の海科学館」では、普段「コンパス」において恒常的に未就学世代とその保護者と接している当館職員が当日スタッフとして参加し、事業趣旨や運営ノウハウの共有をおこなった。

今後も、地域の実情を考慮しながら、過去の開催事例や当館のノウハウを実施館と共有することで、より効果的に未就学世代の科学リテラシー涵養を促すことができると考える。

今後の展開として、来年度以降は近隣図書館と連携し、例えば未就学世代向けの絵本の選び方や絵本が持つ意味についての紹介を依頼することを検討している。こうした地域の様々な施設が持つ、資源や人材などの強みを活用することで、従来は博物館（職員）と来館者のあいだに形成されていたネットワークが、博物館、来館者、出版社、図書館、さらには児童館や書店へと広がり、新たな連携の可能性を生むと考えている。

また、少子化や核家族化など、子供をめぐる社会環境が大きく変化している中で、幼稚園や

---

保育園などの施設だけではなく、地域社会に求められる役割もこれまで以上に大きくなっている（※5）。このような状況の下、様々な施設や団体が関わりを持つことのできる「絵本」という媒体をきっかけに、博物館が中心となって連携の輪を創りだし、未就学世代が地域社会で学んでいくという文化を育てていくことは意義が大きいと考えている。そうしたことも意識しながら、今後も「えほん meets 博物館」をより効果的な事業にしていきたい。

#### 引用・参考文献

- ※1 小川義和：平成22年度財団法人文教協会研究助成「知の循環型社会の構築に向けた、科学リテラシー涵養に資する科学系博物館の学習プログラムの体系化・構造化に関する実践的研究」報告書、2011年
- ※2 中央教育審議会：「少子化と教育について」報告、2000年
- ※3 文部科学省：幼稚園教育要領、2008年
- ※4 秋田喜代美：絵本をめぐるコミュニケーション-親子の響きあい/やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかる乳幼児心理学(ミネルヴァ書房)、2008年
- ※5 文部科学省：子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)、2005年